

# 県立図書館だより

平成30年10月

青森県立図書館報 第32号

## 開館90周年記念バックヤードツアー



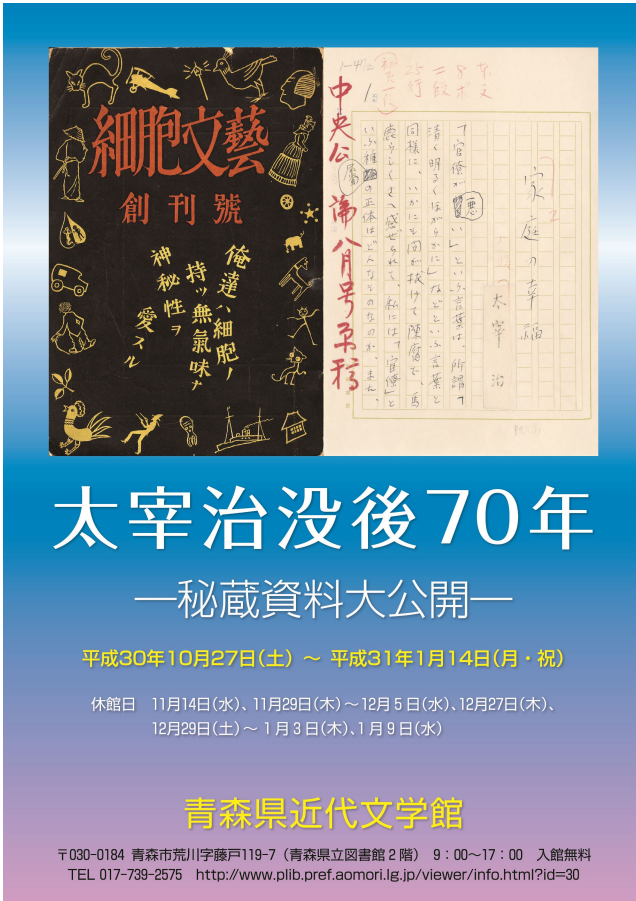
青森県立図書館は今年で開館90周年となり、これを記念してバックヤードツアーを行い、ふだん一般の方が入室できない書庫等を御案内しました。左は50年前の新聞に見入る参加者。  
(平成30年9月30日)

### 目 次

開館90周年記念バックヤードツアー	.....	1
太宰治没後70年 ー秘蔵資料大公開ー	.....	2
こんなレファレンスがありました	.....	3
こどものひろば	.....	5
ご存じですか？ この資料	.....	6
ようこそ文学館へ！	.....	7
カウンターからひとこと	.....	8

## 「太宰治没後70年—秘蔵資料大公開—」開催

青森県近代文学館では本年10月27日(土)から平成31年1月14日(月・祝)まで、企画展示室(県立図書館2階)において「太宰治没後70年—秘蔵資料大公開—」を開催します。



The poster features a dark background with gold and white illustrations of various figures and objects. The title '細胞文藝' (Cell Literature) is written in large, stylized gold characters. Below it, '創刊号' (First Issue) is written in white. To the right, there is a photograph of a handwritten manuscript page with the name '太宰治' (Taizaiji) visible. The main title '太宰治没後70年—秘蔵資料大公開—' is prominently displayed in white and yellow. Below the title, the dates '平成30年10月27日(土) ~ 平成31年1月14日(月・祝)' are listed. The venue '青森県近代文学館' (Aomori Prefecture Modern Literature Museum) is mentioned at the bottom, along with contact information: 〒030-0184 青森市荒川字藤戸119-7 (青森県立図書館2階) 9:00~17:00 入館無料 TEL 017-739-2575 <http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/viewer/info.html?id=30>

太宰治(本名・津島修治)は明治42(1909)年に北津軽郡金木村(現五所川原市)で生まれ、青森中学在学中に作家になることを決意。官立弘前高等学校で学んだのち上京し、昭和11(1936)年には第一創作集『晩年』を出版しました。

昭和15年「走れメロス」を発表。戦時中も『津軽』や『お伽草紙』等の名作を生み出し、戦後は『斜陽』がベストセラーとなりました。

昭和23年「人間失格」連載中の突然の逝去から70年を経た今、当館で所蔵する太宰資料の数々を公開し、その生涯と業績を振り返ります。これまで有名資料の陰に隠れ、知られる機会の少なかった資料群にも光を当てます。(7ページの「ようこそ文学館へ! 近代文学館資料の紹介」も合わせて御覧ください)

また、会期中の11月18日(日)には、14時から15時まで、日曜講座「青森県近代文学館が誇る珠玉の太宰資料」(講師:竹浪直人文学専門主幹)を開催します。会場は青森県立図書館4階研修室、事前申し込みは不要、参加無料です。皆様の御来場をお待ちしています。

～ こんなレファレンスがありました ～

【第29回】

## 故郷(ふるさと)の話題読み語り 「瀬祭しながら“川瀬”を考える！」



本年6月29日に発生した台風7号と梅雨前線等により7月上旬にかけて西日本を襲った「平成30年7月豪雨」は、多くの尊い命を奪い、各地に甚大な被害を与えました。亡くなられた方々のご冥福と、未だ傷痕の残る被災地の一刻も早い復旧・復興をお祈りいたします。

さて、今回被害が大きかった地域の一つに山口県岩国市があります。

岩国市には、「瀬祭(だっさい)」という、お酒好きな人は勿論、そうでない人も、一度は聞いたことがあるのではないかと思う世界的に有名な日本酒の酒蔵があります。

この酒蔵もまた、今回の豪雨で大きな被害を受けました。蔵の復旧に大変な最中にあるながら、この酒蔵さんは、僅かに残ったお酒を地域の復旧に役立てようと、同市出身で、漫画『課長島耕作』で知られる弘兼憲史さんがラベルを手掛けた「瀬祭」を、復興チャリティーとして販売したことが、ニュースなどで報じられました。



「瀬祭」  
川端 瀧子 作  
(かわばた りゅうし)

この「瀬祭」という銘柄に使われている言葉ですが、瀬(かわうそ：川瀬とも表記されます。)が、捕らえた魚を供物のように川岸に並べることから、祭儀になぞらえ、それが転じて、詩や文をつくる時多くの参考資料などを広げておく様を表しています。

今回のご質問は、この川瀬のお話です。

### 【質問】

農林省発行の『鳥獣報告集』には、1931年8月に油川町・新井田川付近でカワウソが出没していたという事例が紹介されているという論文を見ました。

しかし、調べてみたところ、油川町には新井田川は無いようです。

別の川のことでしょうか。

『鳥獣報告集』では、どのように記述されているのでしょうか。

『鳥獣報告集』は、全国各地の研究機関、研究者に委託した野生鳥獣調査の報告として、農林省畜産局(後に山林局)により昭和4年から15年まで、刊行されていたものです。

お問い合わせにあった、「油川・新井田の川瀬」に関する記事は、第7巻第13号に掲載された昭和6年8月1日の報告の一部です。

お問い合わせにあった記事は、1931(昭和6)年8月に報告されていますが、観察は、同年5月26日に油川町附近で行われたものです。

カワウソが出没していたことについては、この観察時という記述ではありません。

鳥類の観察報告の文末に、「同(新井田川と油川町間の)海岸は、旅鳥の集散地とし



て猟家に知られ、且カワウソは新井田川に出没する地点なり（同所知附近に無線電信所あり）」として、鳥類の集まる場所であることに加え、カワウソも出没する地点だと、既知の事柄を付記したものです。

さて、もう一点の「新井田川は、（この油川地区には）ない。」について、上記の記述中には、確かに「新井田川」と書かれています。果たして「新井田川」は実在するのでしょうか、或いは誤りで、他の川のことなのでしょうか。

『角川日本地名大辞典 2 青森県』（「角川日本地名大辞典」編纂委員会 角川書店 1985）八戸市の「新井田（にいだ）」、或いは「新井田川（にいだがわ）」の項目はありますが、青森市の“新井田”の項目は、ありません。



では、地図ではどうでしょう。

☞ (左図)

「国土地理院の電子地形図 25000 を掲載」

このあたりは、「新田（にいた）」と呼ばれる地域です。

前述の『角川日本地名大辞典』によれば、近代初頭まで「新田」は、「にいた」と読み、「新井田」と書くこともあった. となっています。

確かに、地図をよく見ると「新城川」の河口近くに架かっている橋には、「新井田橋」と、名前が残っています。流れている川は「新城川」ですが、こちらを調べると、「～下流では新田にいた川とも呼ばれる。」とあり、新城川が「新（井）田川」であることが分かります。

利用者の方へは、河口付近では「新（井）田川」とも呼ばれる「新城川」があり、『鳥獣報告集』のとおりであることを出典資料と共にお伝えし、調査を終了しました。

さて、『鳥獣報告集』に所収された、この報告は「和田干蔵（わだ-かんぞう）」氏によるものです。

和田氏は、南津軽郡竹館村（現平川市：旧平賀町竹館）生まれで、2年間八甲田に籠って研究したモリアオガエルの生態や、青森市付近でのシュレーゲルアオガエルの生態研究で評価・注目を集めた生物学者です。後に、弘前大学教授などを務めています。

今回調査・確認に使用した『鳥獣報告集』は復刻版で、その巻頭の「『鳥獣報告集』復刻版の刊行にあたって」では、当時各地の第一線で活躍していた研究者の一人として和田氏の名前も挙げられ、また、鳥に関する報告では、特に情報量が多い地域として「青森県や八甲田山」も挙げられているのは、和田氏の尽力によるものでしょう。

報告集の中には、昭和8年の津波のとき、約80,000羽のウミネコが沖合に移動した報告は、ウミネコに地震予知能力があるのではという可能性が指摘されていることなど、興味深い情報が沢山あります。是非一度、ご覧ください。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757  
電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

# こどものひろば



## 絵手紙から生まれた『ピーターラビットのおはなし』

親愛なるノエル君へ

あなたにどんな手紙を書いてよいのかわからないので、四匹の子うさぎのお話をすることにしましょう。名前は、フロプシーとモプシーとカントンテールと、それからピーターです。

1893年、作者ビアトリクス・ポターが5歳の少年ノエルに宛てて書いた絵手紙、これがピーターラビットの元になった作品です。ノエルは、ビアトリクスの昔の家庭教師の息子で、手紙をもらったときは、ポリオという病気と闘っていました。ビアトリクスは、病床にいるノエルへの励ましのメッセージとして、いたずらっこのピーターが出てくる物語を、絵手紙という形で送ったのです。

この絵手紙を、「絵本として小さな子どもたちに読んでほしい」とビアトリクスが考えたことにより、『ピーターラビットのおはなし』が生まれました。

初めは、1901年に私家版として出版され、その翌年1902年に、出版社から『ピーターラビットのおはなし』が出版されました。そして、100年以上たった今でも、世界中で読み継がれています。



### 『ピーターラビットのおはなし』

いたずら好きのうさぎのピーターが、マクレガーさんの庭に入りこんで野菜を食べていると、彼に見つかってしまいます。逃げている最中、靴は脱げ、上着のボタンは網に引っかかり…。ピーターは、マクレガーさんの畑から無事に脱出することができるのでしょうか。

ピーターラビットの絵本シリーズには、たくさんのキャラクターが出てきます。ピーターの家族や、その子どもたち、子どもたちを助けるねずみのチュウチュウおくさん…。うさぎだけではなく、ねずみやこねこ、あひるやきつね、こぶたやかえるも登場します。ひとつの物語だけでなく、複数のお話に登場するキャラクターもいるので、その関係性に注目してみるのもひとつの楽しみ方です。



イギリスの湖水地方の美しさに魅了されたビアトリクス・ポターが描くピーターラビットの絵本シリーズを読んで、動物たちの世界に触れ、そして、舞台である自然に思いをはせてみてはいかがでしょうか。



今年も10月23日「津軽弁の日」がやってきます。10月23日は、青森市に生まれた方言詩人高木恭造<sup>たかぎきょうぞう</sup> (1903~1987)の命日です。恭造は、旧制弘前高等学校を卒業し勤めた「青森日報社」において、詩人の福士幸次郎 (1889年弘前市生まれ) と運命的な出会いをします。幸次郎に「詩というものは、借りものゝ言葉ではなく、自分の本当に持っている言葉で書くものだよ。」「徹底的に方言で書いてごらん。」(『走り書覚え書』より)と勧められたことがきっかけで、のちに方言詩人として知られるようになります。

恭造自身が朗読をした方言詩がラジオで流れたり、テレビに出演したりすることで、聞く人に深い感動と衝撃を与えました。そんな恭造が亡くなった翌年(1988)、彼をしのぶとともに、津軽弁を見直そうと「津軽弁の日」が制定されました。発起人のひとりであった牧良介<sup>まきりょうすけ</sup> (舞台役者、ライブ・プロデューサー 1937~1992)がその制定にあたって、「(略)『津軽弁の日』ズのをこへで、みんなしてその味コ消さねえにすべし<sup>(注)</sup>て、ハンカクセ<sup>(注)</sup>くてもいい、モツケ<sup>(注)</sup>でもいい、面白可笑しく騒いで遊ぶごとにしたのし。(略)」(『津軽弁の日 第1集』より)と言葉を添えています。

そこで、今回は、津軽弁にちなんだ資料を紹介します。テレビインタビューなどには必ずと言っていいほど、標準語の字幕が入ります。そんな青森の方言に触れてみませんか。

### 『方言詩集まるめろ』(高木恭造著 (津軽書房 1988))

大正14年から昭和2年にかけて青森日報紙や詩誌「獵騎兵」などに発表した作品を詩集としてまとめた「方言詩集まるめろ」のほか、「方言詩集雪女」「方言による三つの物語」等が収録。

### 『わが青春のまるめろ—高木恭造の世界』(カセットテープ)

朗読講演は高木恭造<sup>みかみかん</sup>。三上寛氏のギター伴奏のもと、詩にまつわる思い出話を交え、『まるめろ』に収録されているすべての詩を朗読。

### 『津軽弁の日 第18回~第30回』(津軽弁の日やるべし会 2005~2017) (CD)

毎年10月23日に開催されたイベント「津軽弁の日」の様相を収録。津軽弁による俳句、短歌、詩などを披露しています。



The New York Public Library Digital Collections より

(注) はんかくせ…ばかばかしい むつけ…おせっかい・変り者  
ズーム  
(『図夢in つがる弁』(渋谷龍一著 路上社 1987)より)



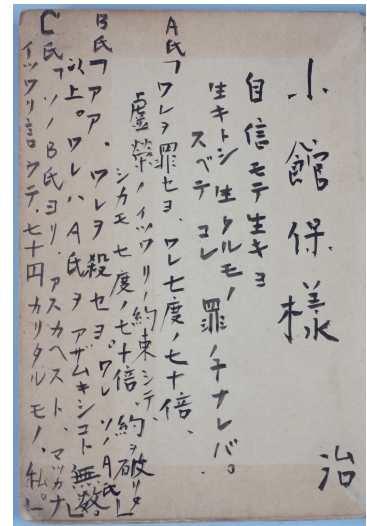
## ようこそ文学館へ！

### 近代文学館資料の紹介(第31回)

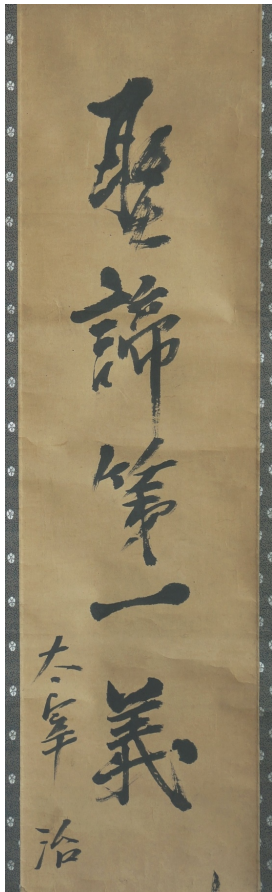
本号2ページでも紹介している「太宰治没後70年—秘蔵資料大公開—」(平成30年10月27日～31年1月14日)の展示資料から、2点を取り上げます。

#### 小館保宛献辞入りの『晩年』

太宰治の第一創作集『晩年』は昭和11年6月に砂子屋書房から刊行されました。太宰が友人らに贈った献辞入りの『晩年』は30冊程確認されていますが、うち24冊は文言が全く異なります。当館では、小館保・善四郎兄弟(太宰の姉きやうの義弟たち)旧蔵の2冊を所蔵しています。小館保宛の方には「自信モチ生キヨ～」のフレーズが存在し、これが映画公開も近く昨今話題の「ビブリア古書堂の事件手帖」シリーズに登場する『晩年』のモデルになったと見られます。



#### 太宰治書幅「聖諦第一義」

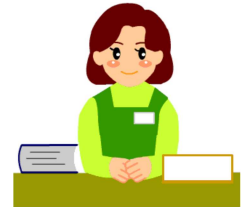


『碧巖録(へきがんろく)』は中国の禅僧、圓悟(えんご、1063～1135)によって編まれた公案集ですが、その第一則には、梁の国の皇帝である武帝と達磨大師が登場します。

寺院を多く建立した武帝ですが、達磨大師に会い、自らの功德の大きさを確認しようとした所、「功德なし」と突き放されてしまいます。そこで武帝が発した質問の言葉が、「如何なるかこれ聖諦第一義」でした。『碧巖録私話』(著者は菅原時保)という書物では「聖諦(しょうたい)第一義」は「仏法の全体、大道の全部」と注解されています。それに達磨大師は、「悟りの境地においては、もはや捨てるべき迷いも、求むべき悟りもない」(『広辞苑』)ことを意味する「廓然無聖(かくねんむしょう)」と答えたそうです。

「聖諦第一義」という言葉には以上のような来歴があり、当館蔵の書幅からは太宰が漢籍に親しんでいたことが窺えます。なお太宰は、浦島太郎が龍宮で「聖諦(せいてい)」という名の曲を聞き「自分たちの趣味と段違ひの崇高なものを感得」する場面を『お伽草紙』に登場させています。

# カウンターからひとこと (第30回)



図書館で本を読んでいるとき、急に「メモ用紙が欲しい」「拡大鏡があれば…」などと思ったことはありませんか。

読書や調査研究をする上で必要になったものがあれば、お気軽に一般閲覧室カウンターにお声かけください。

例えばこのようなものを提供・貸出します。

- ・ 借りた本を入れるビニール袋
- ・ メモ用紙
- ・ 筆記用具（えんぴつ、消しゴム、修正テープ等）
- ・ えんぴつ削り
- ・ 定規
- ・ 老眼鏡（リーディンググラス）
- ・ 拡大鏡（ルーペ）
- ・ 筆談ボード



安全確保や資料保存のため、カウンター付近でお使いいただくもの

- ・ セロハンテープ
- ・ のり
- ・ ホチキス
- ・ ハサミ



一般閲覧室の忘れ物・落とし物コーナー

カウンターでは、「図書館カレンダー」や「一般閲覧室、参考・郷土室 配置・配架図」、「バス時刻表」を提供しているほか、館内での忘れ物・落とし物も置いてあります。

本の貸出・返却だけでなく、何かお困りのことがありましたら、遠慮なく一般閲覧室カウンターにお越しください。